

彙報

一九八九年一月より
一九八九年二月まで

研究状況

班研究

東 方 部

古史新證

班長 林 巳奈夫
前年に引き続き中國新石器時代から秦漢時代までの出土資料に關する諸問題について、班員の研究發表を隔週で行い、八九年三月で三年間の共同研究を終了した。過去一年間に當班で發表されたものの幾つかを、『古史春秋』第六號として九〇年一月に公刊する豫定。

中國近世の法制と社會

班長 梅原 郁
唐代において一つのピークに達した中國の法制は、所謂「律令制度」との關わりの面から、從來より日本でも多くの研究者の關心を引きつけてきた。また、元代の法制に關しては、『元典章』『通制條格』などを通して本研究所でも優れた研究成果をあげてきた。しかし、その中間にあり、しかも中國法制史における注目すべきエポックでもある宋代の法制については、これまで必ずしも十分に究明されてきたとは言い難い。本共同研究では、南宋の『慶元條法事類』と、最近その存在を知られるようになった明板『名公書判清明集』の會讀を

班長 林 巳奈夫

班長 梅原 郁

通じて、律令時代から敕令時代への移行、地方末端での法規的具體的運用等の問題を、様々な視角から考究する。現在、毎週『條法事類』と『清明集』とを交互に讀みながら、問題點を檢討しつつ、現代語譯と注釋を作成している。本年に前者を卷十二・職制門九まで、後者は卷十四・懲惡門を讀了した。

中國科學史文獻研究

班長 山田 慶兒

一九八七年から「中國科學史文獻研究」班を組織し、三か年の豫定で、これまであまり取り上げることなかった諸種の文獻の檢討を進めている。とりあげる文獻は大きく二つに分かれる。一つは、最近出土した科學文獻のうち、『新發現中國科學史資料の研究・譯注篇』を公刊した時點以後に公表されたもの。これはすでに譯注の作成を終えている。一つは、中國科學の個々の達成よりもむしろ、中國科學の方法・思想・組織、あるいは外國の知識の受容過程などがよくわかる、科學のすべての分野にわたる文獻。これまでに數學、天文學、本草、建築などの文獻數種を讀みすすんできた。會讀にとりあげた文獻はすべて譯注を作っている。編集・出版し、また最終年度にあたり、全員が別に研究論文の執筆をすすめている。これらをおわけて、一九九〇年度にはなんとか出版の目途をつけたいと考えている。

この期間中におこなわれた研究報告は左記の通りである。

一月三十一日 A Work on the Materia

Medica in the Taoist

Canon Fabricio Pregadio

二月二日 中國庭園の初期的風格

田中 淡

四月一八日 湯液について

廖 育群

五月三日 傳統社會における知識人の技

術觀 山田 慶兒

六月二七日 崇禎改曆と「見界總星圖」

橋本 敬造

七月一五日 周易參同契における同類の思想

村上 嘉實

九月二六日 陰陽と式占

山田 慶兒

一〇月一七日 黔东南侗寨考查記

田中 淡

二月七日 中國における科學史研究の近況

杜 石然

二月一四日 江南製造總局と科學技術文獻

橋本 敬造

二月二二日 『素問』與『靈樞』中的脈診

廖 育群

文人の生活

班長 荒井 健

一九八六年度より向う五年の豫定で、舊中國の文人の生活全般について、「江南文人の研究」班の成果をふまえ、精神的・物質的の両面から総合的な檢討を行ってみようという目的で、本研究班を發足させる。舊江南文人班よりは一層廣範・包括的なテーマをあえて掲げたのは、班員おのおのの關心のありようからして、研究對象をむしろ限定しないほうをよしと考えたのである。研究の進め

かたとしては、舊班と同じく、下記のとおり各分野の報告と並行して、明代十六世紀末の最も廣範圍の文人趣味文獻たる「遵生八牋」の内容を検討して行く。今期は清修妙論・四時調攝の兩牋に眼を通した。なおこれまで會讀を續けた「長物志」は卷八を讀了、全卷の譯注稿を整理中。

一月一三日 文人と隱逸(再續)

茂木 信之

四月二八日 坂出祥仲氏に聞く「明清の養生術」

神田先生舊藏善本觀書

六月九日 神田先生舊藏善本觀書

六月二三日 李遠國氏に聞く「明清養生術の流派について」

山志一について 荒井 健

九月二九日 明末紹興の庭園記―祁彪佳「寓山志」について

荒井 健

一〇月六日 雲煙と中國文化 合山 究

一二月二日 李後主の文房趣味 村上 哲見

目錄學の諸問題 班長 尾崎雄二郎

今年度、「目錄學の諸問題」班の目錄班(A班)では、前年度に引續き黃丕烈「士禮居藏書題跋記」の會讀を進めた。

一方、小學班(B班)は、語學をテーマとする各班員の研究報告を行なった。

一九二〇年代の中國 班長 狹間 直樹

本研究会は「國民革命の研究」班の成果をふま

えながら、研究對象とする時期を「二〇年代」にし

ぼることによつて、新しい視角から國民革命期

の中國をとらえなおそうとするものである。各班

員は、政治、經濟、社會、思想、文化などの諸テ

ーマについて研究をすすめている。また、國外の

研究者とも交流の機會をもつようつとめている。

七月七日曾業英氏(中國社會科學院近代史研究所副研究員)、十月二十七日張允侯氏(同前)、及び十一月十日李時岳氏(廣東省社會科學院歷史研究所研究員)の報告はそれぞれ本研究所來訪のにおりにお願いしたものである。八九年の研究報告は次のとおりである。

一月一三日 錢莊から銀行へ 川井 悟

一月二〇日 五四時期家族論の背景 小野 和子

一月二七日 陳獨秀の「二回革命論」 江田 憲治

四月二八日 一九二〇年代の出發點としての五四運動研究の最近の動向 狹間 直樹

五月二日 愛國布は亡國布? 森 時彦

五月九日 山丁における郷土文學 村田 裕子

五月二六日 ボロディンの中國戰略 松尾 洋二

六月二日 宋教仁と陽明學 竹内 弘行

六月九日 二十世紀初頭の社會調查資料を採しとめて 中村 哲夫

六月一六日 梁漱溟と毛澤東 河田 悌一

六月二三日 一九二〇年代の國粹思想 森 紀子

六月三〇日 一九二〇年代の文學的諸問題 萩野 脩二

七月七日 蔡鍔與護國戰爭 曾 業英

九月二九日 五四運動前後の王光祈 小野 信爾

十月六日 中國における協同組合思想の

受容 菊池 一隆

放運動 水野 直樹

五四時期の中國に於けるマルクス主義の受容 石川 禎浩

洋關の成立に關する一考察 岡本 隆司

一〇月二七日 論五四時期的合作主義思潮 張 允侯

十一月二〇日 外國資本主義與中國社會發展 李 時岳

十一月二七日 二〇年代廣東の土匪・民團・農民自衛軍 蒲 豊彦

十一月二四日 瞿秋白と國民革命論 江田 憲治

十二月一日 蔡元培の女性觀 石田 米子

十二月八日 辛亥革命期のアナーキズム 内藤 明子

六朝道教の研究 班長 吉川 忠夫

發足から四年目をむかえた本研究班は、梁の陶弘景が編纂した『眞誥』七篇全二十卷のうち、第一卷から第七卷のなかばまでと、第十九・二十卷との譯注をおえた。またその間、左記の研究發表を行った。

一月八日 『眞誥』中の押韻字に見える吳語現象 赤松 祐子

二月一五日 「心如明鏡還是泉流?―南宗禪心性說影響於中國詩論的一個側面」 孫 昌武

五月三十一日 「尋藥から存思へ―『神仙傳』と『眞誥』とのあいだ」

六月二八日 「日中無影」 小南 一郎
吉川 忠夫

一〇月四日 「大洞真經三十九章について」 麥谷 邦夫

十一月一日 「唐代樓觀考—歐陽詢撰「大唐宗聖觀記」碑を手掛かりに」 愛宕 元

十一月二九日 「方諸青童君をめぐる」 神塚 淑子

中國中世の文物 班長 礪波 護

本研究班では昨年に引き續き、隔週水曜日の研究会で、秦漢から五代に至る時代の出土文物に關する班員の研究發表が行われた。八九年の發表題目は以下のとおり。

一月二五日 郭氏家廟碑について 辻 正博

五月一〇日 唐代祭陽鄭氏と本貫地の關係 愛宕 元

五月二四日 漢代エチナ川流域の關所とその機能 富谷 至

六月七日 黄紙と白簡 中村 圭爾

六月二日 扶風法門寺の出土文物、關係碑刻およびその歴史 氣賀澤保規

七月五日 京都大學藏唐墓誌二種—段會墓誌と崔粹夫人鄭氏合耐墓誌— 礪波 護

九月二七日 唐李賢墓・李重潤墓壁畫の山水表現について 河野 道房

一〇月二日 前漢の中朝をめぐる 藤田 高夫

一〇月二五日 漢長安城未央宮3號建築遺址について 佐原 康夫

十一月八日 南朝帝陵の石獸と磚畫 曾布川 寛

十一月二三日 『臣軌』小論—唐代前半期の國家と國家イデオロギー— 渡邊信一郎

十二月六日 計算機を用いた中國文獻研究の現状 勝村 哲也

四—八世紀の中央アジアとインド 班長 柴山 正進

一九八六年四月より五年計畫で開始した研究班の目標（東方學報第五十九冊、六〇—四頁參照）のうち、『往五天竺國傳』の現代語譯と注釋との公刊にむけて再度譯文のチェックを九月から開始した。さかのぼって一月から六月までは『悟空行紀』の譯注作成をおこなった。テキストは高麗本・大正藏經本を併用し、舊譯であるシャヴァンヌ譯とスタイン注釋を參考にした。一方四月にはコレージュ・ド・フランス教授ジュエール・フスマン博士を招聘し、カラカルム・ハイウエイ沿いの佛教美術・碑銘に關し三回の講義をお願いした。

中國古代禮制研究 班長 小南 一郎

一九八九年四月より、五年の豫定で開始された本研究班は、中國古代社會における禮制度の機能、および禮の傳統が「禮學」として後世に傳承される諸様相を明らかにしようとするものである。具體的な作業としては、三禮内の「周禮」を取り上げ、その中でも宗教的な色彩の濃い春官篇を、本文と鄭玄注に對して譯註を附けながら讀んでいる。基本のテキストとして選んだ賈公彦の疏は、

議論が煩瑣で、なかなか解讀が進行せぬのであるが、出版できるかたちに纏める豫定である。こうした作業と並行して、次のような研究發表が行なわれた。

六月二七日 廬植の「禮記解詁」について 池田 秀三

一〇月二四日 錢穆・顧頡剛の「周禮」理解をめぐる 仲 畑信

十一月二八日 「周禮」眞僞之爭及其書寫成的眞實依據 中國社會科學院歷史研究所 劉 起鈺

日本部

近代日本のアジア認識 班長 古屋 哲夫

本研究は、近代日本においてアジアという言葉が、どのような情報にもとづき、どのような目的のもとに使用されてきたかを、明らかにしようとするものである。そしてそのためには、(1)アジアからの情報が日本にもたらされる道筋と仕組、(2)日本人のアジアへの要求のあり方と進出の仕方、(3)アジアの觀念を利用した日本人の國民的使命觀の創出、などの問題を検討することが必要となる。

文學から何がみえてくるか 班長 飛鳥井雅道

茫漠たる表題を掲げて發足した當研究会も一年目を終了しようとしている。初年度は自己紹介を兼ねた報告の積み重ねと、文學理論研究の出發點としての宣長の『紫文要領』をとりあげた讀書會との二本立てで、かなり濃密な研究會を持てた。個々の班員の守備範圍は廣汎であるが、これまでの報告では、「近代」「テキストの構造と理論化」

「身體表現」など、いくつかの論點への收束の可能性がうかがえる。次年度はこれらの動きに方向を與える形で議論を進めてゆきたい。

「滿洲國」の研究

班長 山本 有造

本研究會は、日本の植民地支配の主要な一環をなした「滿洲」―中國東北地域について、その最終形態としての「滿洲國」期に焦點をあて、支配の實態を統一的に（政治的・經濟的・文化的諸側面、ならびに日本植民地史および中國地域史的アプローチを合せて）究明しようとする。一年間の準備會ののち、一九八七年四月より正式に發足し、現在隔週に研究會を開いている。

關西における關係研究者の数が限られているため、關東方面からゲスト・スピーカーを招くなど報告の幅を広げるよう努力している。

貝原益軒とその時代

班長 横山 俊夫

一七世紀後半から一八世紀初頭にかけての安定期日本社會の性格を考えるため、貝原益軒の著述を學際的な視野から検討している。益軒の知的活動の廣さと讀者層の多様さが、その著述に獨特の社會性を與えていたと考えられるからである。

第二年度の活動として、『君子訓』『京城勝覽』『慎思錄』卷十二「養生」「寛文日記」の精讀を試みた。日本、東方、西洋各部にまたがる班員構成に加え、本年はハーバード大學からハロルド・ポライソ教授、オックスフォード大學からジェイムズ・マックマレン博士を客員に迎えた。

明治維新期の研究

班長 佐々木 克

現在の日本近代史研究の動向は、かつて明治維新を、絶對主義天皇政權の誕生とみなしていた見解から、論者によつてはさまざまな註釋つきなが

らも、それはブルジョア革命であった、とする理解が主な潮流となつている。こうした變化をもたらした要因の一つは、急速に展開した地方自治體史の編さんにもなる史資料の發掘であり、また公・私文書の大量の公開・刊行という新たな状況によるものである。しかしながら、明治維新についての發言は、ほゞ近代史の研究者に限られ、また新史料も必ずしも十分に消化・吸收されているとはいひ難い。そこで當研究班では、近世史研究者の協力を得て、新しい史料を把握した上で、研究史を再検討し、明治維新を化政期から憲法體制成立期（およそ一九世紀全體）に至る長い時空中で考え、かつ政治のみならず、思想・文化・經濟・社會等々さまざまな分野からのアプローチを試み、しかも變革の面と繼承の面と雙方に留意しつつ個別研究を積重ね、最終的には、明治維新とはいかなるものであったか、ということを明確にすることを目標としている。

西洋部・客員部門

班長 山下 正男

法的思考の研究
二〇世紀における論理學の研究はまことにめざましいものであるが、そうした論理學はすべて存在の論理學と呼ばれるべきものであつて、當爲の論理學の研究は大そうおおくれている。本研究はそうしたアンバランスを是正することを目的とする。そのために(1)義務論理學 (deontic logic) の確立、(2)法律家たちの現場における法的思考法の分析、(3)一般人の倫理・道徳の場における思考法の分析、等の諸作業をおこなうたい。

以上の作業は論理學、法學、倫理學の各分野の

専門家たちが共同しておこなうものとする。
專家の比較的研究

班長 中村賢二郎

本研究では、前近代社會における國家の諸機能分析した。ヨーロッパ中、近世を主考察對象としたが、同時に、ヨーロッパ近代、日本、中國、アジア諸國家との對比作業も行われた。班員の關心は、同時代の王權觀、王權のイデオロギー機能、民族意識、國民意識の成立と變容、國家の諸制度とりわけ財政制度に收斂し、一九八九年三月、研究會が終了するとともに、共同研究報告書『國家―理念と制度―』を刊行することができた。
家族とハウスホルドの比較的研究

班長 前川 和也

前工業化段階の諸社會における「家族」と「ハウスホルド」の多様なあり方を考察している。中、近世ヨーロッパを専攻する班員がもつとも多いが、加え、一九世紀ヨーロッパ、古典古代、古代西アジア、イスラム、日本、中國研究者も參加している。

本年度は、ライフサイクルの諸問題、「家」・「家門」意識の成立と繼承、その物質的基礎、などに班員の關心が集中している。

民族誌記述の方法をめぐつて 班長 谷 泰

初年度（八六年）は主に、民族誌記述の方法に係わる議論の批判的紹介に焦點をおいた。八七、八八年度は、個々の班員のフィールドおよび關心對象に應じて、具體的な民族誌的ケース・スタディの報告がなされた。八九年度は、各班員が論文執筆を前提とした報告をおこない、書きあげられた論文については合評會をおこなうという形式をとつた。記述の對象は様々であるが、方法論につ

いは共通の問題點が確認されている。各班員の論文はほぼ完成しており、近く人文書院から出版される豫定である。

知識と秩序 —— 近代におけるその再編過程 ——

班長 阪上 孝

フランス革命をはさんで一八世紀半から一八三〇年頃に至る時期は、政治・經濟の領域のみならず知識の領域においても大きな革新が進行し、しかも、知識と社會の關係が大きく變化した時代である。社會秩序は神によって與えられたものではなく人間が作るものだという新たな前提のもとで、秩序の建設のための知識の形成、その知識の制度化・社會化が重要な課題となり、またそれにとりなつて社會における知識人集團の問題が現れてくるのである。本研究は、この時期の知識と秩序の關係を多角的に検討することによって、近代社會の問題性をその原點において把握し、同時に二百周年を迎えたフランス革命について、従來とはちがった角度から光を當てることを目的とするものである。現在、最終年度も、おわりに近づき、これまでの成果をふまえた報告書の刊行を計劃中であり、班員各自の論文執筆とその検討の作業を開始しようとしている。

フランス・ロマン主義の研究

班長 宇佐美 齊

前年にひきつづき、フランス・ロマン主義の多角的な分析とその総合をめざして、各班員の口頭発表、討論を中心に研究會を積み重ねた。活動開始後三年目にあたる四月以降は、以下の三つの視點に着目するが、研究報告がなされた。一、轉換期の時代の流れと社會變動との関わりのなかで浮かびあがるロマン主義的藝術家像の諸相。二、

言語藝術と空間藝術との関わりに着目しながら、ロマン主義がヴィジョンの記述史に残した足跡を追尋する。三、ロマン主義における「私」の問題。今後は、一九九一年春の研究成果報告書の出版に向けて、さらに努力を積み重ねる所存である。

傳統文化の構造 —— 古代インドとインド・ヨーロッパ諸民族の文化比較 ——

班長 井狩 彌介

第三年度の本研究班は、前年度に引續いて北西インドのカシミール地域におけるヒンドゥーイズムの傳統文化がどのように編成されたかの諸問題を、同地最古のヒンドゥーイズム文獻「ニラマタ」を中心に検討を進め、同テクストの全體の會讀を終えることができた。引續き、儀禮、曆法、聖地傳承神話などの中心主題に關して、ヒンドゥーイズムの他の同種文獻、後代の綱要書（ダルマニバンダ）などとの比較を通じて本テクストの内容の特徴を明確化する作業に移っている。また、新寫本を含む關係諸寫本の検討から、本テクストの最終編纂に至る過程についての新たな知見も得られている。目下、研究の總括に向けての諸作業を進めつつある段階である。

班員 井狩彌介 ミヒヤエル・ウィッツェル

船山徹 山下正男（所内） 狩野恭 徳永宗雄 御牧克己（以上文學部） 赤松明彦（九州大） 永ノ尾信悟（國立民族學博物館） 榎本文雄（華頂女子短大） 黒田泰司 八木徹（以上大阪學院短大） 島岩引田弘道（以上愛知學院大） 正信公章 渡瀬信之（以上東海大） 竹中智泰（常葉學院大） 中谷英明（神戸學院大） 林隆夫（同志社大） 藤井正人（大阪大） 矢野道雄 山上證道（以上京都産業大） 漢代出土文字資料の研究 班長 永田 英正

本研究班では昨年に引き續き、主として漢代石刻資料の釋讀と注釋を進めている。班員が分擔して作成した譯注を毎週の研究會で検討し、殘缺の少ない長文のものは大體讀み終えた。班員の研究発表も折々に行われている。また研究會と平行して、敦煌漢簡と研究所未收の石刻資料を寫真カード化する作業も進行中である。本年の譯注・研究発表の擔當者は以下のとおり。

- | | | |
|-------|------------------------|-------|
| 二月三日 | 張景碑・侍廷里父老彈買田約 | 大川 俊隆 |
| 四月二日 | 高陽令楊著碑・尹宙碑 | 榎山 明 |
| 四月二八日 | 嵩山少室闕・開母闕・堂溪典 | 吉本 道雅 |
| 五月一日 | 請雨嵩岳銘 | 佐原 康夫 |
| 五月二六日 | 史晨前・後碑 | 松井 嘉徳 |
| 六月九日 | 孔宙碑・張遷碑 | 角谷 常子 |
| 六月一六日 | 漢墓の外表施設と内部構造 | 岡村 秀典 |
| 六月二三日 | 三老諱字忌日記・袁安碑・袁敞碑 | 岡村 秀典 |
| 六月三〇日 | 元氏封龍山頌・祀三公山碑 | 船越 信 |
| 九月二二日 | 訪中中間報告―北京・西安・蘭州― | 江村 治樹 |
| 九月二九日 | 嵩山太室闕銘・郷他君石祠堂題記・安國祠堂題記 | 榎山 明 |
| | | 佐原 康夫 |
| | | 杉本 憲司 |

一〇月六日 桐柏淮源廟碑・圍令趙君碑

一〇月一三日 王孝淵墓碑・王孝淵墓門殘碑・三公山神碑 富谷 至

一〇月二〇日 侯史廣德坐罪行罰徽について 兼ねて侯史の職掌を論ず 永田 英正

十一月一〇日 賈武仲妻馬氏墓記・樊敏碑 杉村 邦彦

十一月一七日 劉平國摩崖・吹角霸摩崖・劉熊碑殘石 永田 英正

十一月二四日 □臨爲父作封記・衡方碑 稻葉 一郎

十二月一日 白石神君碑 小南 一郎

○個人研究

東 方 部

中國音韻史の研究

殷周文物の考古學的研究

中國の詩學

宋代の官僚制度

六朝隋唐精神史

隋唐政治社會史研究

五四時期中國社會主義的研究

ポスト・リクシャーノン期中央アジアの考古學的研究

古代中國における説話傳承の研究

中國古代の醫學と思想

中國中世土地所有制の研究

六朝道教思想研究

尾崎雄二郎

林 巳奈夫

荒井 健

梅原 郁

吉川 忠夫

磯波 護

狹間 直樹

柴山 正進

小南 一郎

山田 慶兒

勝村 哲也

麥谷 邦夫

中國美術の様式と意味
中國建築の様式・技法・空間

近代中國の綿紡織業

敦煌文書の言語史的研究

東北作家の文學

明清學術史の研究

一九二〇年代における中國勞働運動

清朝前期における士大夫の思想

中國古代都市の研究

漢唐間における天文學と文化

中國における革命主體形成の研究

中世近世の中國繪畫研究

イスラーム勢力進出期のアフガニスタン・北インド

唯識思想研究

中國中世の政治と社會

日本部

日本近代文化史の研究

日本ファシズムの研究

植民地經濟の研究

廢藩置縣研究

文化史および文明史としての國民國家の形成

日本近世社會における政治權力

政治文化の中の社會理論

日本帝國主義の經濟構造

日本近代文學の研究

近代日本形成期における地域構造

日本近世の地域社會の研究

曾布川 寛

田中 淡

森 時彦

高田 時雄

村田 裕子

井上 進

江田 憲治

三浦 秀一

佐原 康夫

新井 晉司

小林 敦子

河野 道房

稲葉 穰

船山 徹

辻 正博

飛鳥井雅道

古屋 哲夫

山本 有造

佐々木 克

横山 俊夫

藤井 讓治

山室 信一

杉本 俊宏

平田 由美

奥村 弘

塚本 明

西 洋 部

ドイツ宗教改革史

西洋論理想史

社會的相互行為の解讀

思想と制度

シュメール行政・經濟文書の研究

インド世界の儀禮の研究

フランス散文詩の研究

群衆現象の社會學

南アジアにおける宗教と社會

文學理論の研究

ヨーロッパ一二世紀の論理學と意味論

社會構造の概念に関する社會哲學的考察

西歐中世の身分論と社會メタファー

デカダンス文學における自己矛盾の研究

音聲形式の記述と分析

フレデリック・ハリスンとイギリス實證主義

東方部研究会

學報豫備發表

一月二六日 「山丁における郷土文學」

「中國庭園の初期的風格」

二月二日 「宋代『戸』の制度」

中村賢二郎

山下 正男

谷 泰

阪上 孝

前川 和也

井狩 彌介

宇佐美 齊

富永 茂樹

田中 雅一

大浦 康介

岩熊 幸男

淺田 彰

甚野 尙志

鈴木 啓司

藤田 隆則

光永 雅明

村田 裕子

田中 淡

梅原 郁

「藏書と讀書」 井上 進

「王説について」 河野 道房

「李娃傳の構造」 小南 一郎

「女醫と毒藥」 山田 慶兒

「唐代の老子注釋」 麥谷 邦夫

「彭紹升をとりまく精神的情況」 三浦 秀一

二月二日 *Education and Social Change in the People's Republic of China* 小林 敦子

「部分と全體」 船山 徹

「セルジュエーク朝と後期ガスナ朝」 稻葉 稜

三月一日 學報第六一冊書評

一月一日 小南論文評 辻 正博

一月一日 村田論文評 礪波 護

一月一日 井上論文評 高田 時雄

一月一日 森論文評 曾布川 寛

一月二日 佐原論文評 桑山 正進

事業概況

夏期講座 —— 生活空間の文化史 ——

一九八九年八月 於 本館大會議室

一日 京都の町(ちょう) 塚本 明

江戸社會へのまなざし H・ポライソ

孝子のパラダイス —— 漢代祠堂考 ——

漢字以外 佐原 康夫

革命と傳統 —— 民法典の編纂過程 ——

高田 時雄

フランス革命と知識 —— 度量衡の統一と共和暦の制定 —— 阪上 孝

開所記念公開講演會 富永 茂樹

一九八九年一月九日 於 本館大會議室

西歐中世の社會メタファー 甚野 尙志

穀食忌避の思想 麥谷 邦夫

軍事からみた近代日本 古屋 哲夫

停年退官教授講演會 一九八九年三月一六日 午後一時半

中國古代の帝と天 於 本館大會議室

近世ヨーロッパ社會の底邊 林 巳奈夫

感想・大學における研究と「教育」 中村賢二郎

一九八九年度漢籍擔當職員講習會 尾崎雄二郎

「漢籍電算處理」は、本學大型計算機センターの協力を得て、一〇月二日から同月六日まで次のとおり行われた。

二日 人文科學とデータベース(講演) 大型計算機センター教授 星野 聰

東洋學文獻類目と漢籍目錄の電算化(講義) 勝村 哲也

データベースについて(講義) 大型計算機センター助手 萩野 達也

計算機處理入門(講義) 大型計算機センター技官 隈元 榮子

三日 ALA文字と東南アジア言語處理

(講義) 大阪國際大學助教授 柴山 守

東洋學文獻類目の編纂とフォーミング(講義) 都築 澄子

東洋學文獻類目の計算機處理(講義) 大型計算機センター技官 河野 典

學術情報ネットワーク(講義) 大型計算機センター技官 櫻井 恒正

データベース検索(一)(實習) 大型計算機處理(講義) 知識情報處理(講義) 大型計算機センター助教授 松本 裕治

データベース検索(二)(實習) エキスパートシステムと情報検索(講義) 大型計算機センター助教授 大西 淳

學内ネットワーク(講義) 大型計算機センター助教授 金澤 正憲

データベース検索(三)(實習) 附屬圖書館見學 大型計算機センター見學 漢字コードの話(講義) 大型計算機センター技官 小澤 義明

一九八九年漢籍擔當職員講習會

〔初級〕は、一月六日から同月一日まで、

次の通り行われた。

- 六日 漢籍(講義) 梅原 郁
- 目録法(I)(講義) 田中 久子
- 七日 目録法(II)(講義) 田中 久子
- 四部分類(講義) 井波 陵一
- 八日 經・子部書(講義) 高田 時雄
- 實習
- 九日 史部書(講義) 佐原 康夫
- 實習
- 一〇日 新學書(講義) 勝村 哲也
- 實習

所員動靜

- ・浅田 彰助手(西洋部)は、京都大學經濟研究所助教授に昇任(三月一日付)
- ・尾崎雄二郎、林 巳奈夫(東方部)、中村賢二郎(西洋部)三教授は、停年退官(三月三十一日付)、京都大學名譽教授の稱號を授與(四月一日付)
- ・谷 泰教授(西洋部)を當研究所所長及び附屬東洋學文獻センター長に併任(四月一日〜一九九一年三月三十一日)
- ・永田英正滋賀大學教育學部教授は、併任教授(東方部)。(比較文化部門、四月一日〜一九九〇年三月三十一日)
- ・谷山正道廣島大學助教授は、併任助教授(日本部)。(比較文化部門、四月一日〜一九九〇年三月三十一日)
- ・江田憲治助手(東方部)は、辭任(三月三十一日付)の上、京都産業大學外國語學部講師に轉出
- ・山田慶兒教授(東方部)は、國際日本文化研究

- センター教授に轉出(四月一日付)、當研究所併任教授(東方部)。(文化交渉史部門、四月一日〜一九九〇年三月三十一日)
- ・井狩彌介、前川和也(西洋部)兩助教授は、教授に昇任(四月一日付)
- ・高田時雄助教授(東方部)は、京都大學教養部より配置換(四月一日付)
- ・大浦康介甲南女子大學助教授を當研究所助教授(西洋部)に採用(四月一日付)
- ・塚本 明氏を助手(日本部)に採用(四月一日付)
- ・杉本俊宏助手(日本部)は、辭任(一〇月一日付)の上、京都高度技術研究所研究員に就任
- ・光永雅明氏を助手(西洋部)に採用(一月一日付)

- ・小林敦子助手(東方部)は、三月二六日成田發、スタンフォード大學に於いてアメリカ合衆國における中國文獻調査を行い六月一〇日歸國
- ・田中 淡助教授(東方部)は、四月二二日伊丹發、上海他各地に於いて、貴州トン族の高床住居と集落構成に關する調査を行い五月九日歸國
- ・狹間直樹教授、森 時彦助教授(東方部)は、四月二九日伊丹發、北京師範大學、中國社會科學院において、五四運動七〇周年學術討論會参加及び研究資料収集を終え五月八日歸國
- ・田中 淡助教授(東方部)は、五月一七日成田發、ダンバートン・オークス造園研究センターに於いて造園藝術史の情況シンポジウムに出席し、ペンシルバニア大學、フィラデルフィア美術館、フォッグ美術館、メトロポリタン美術館において資料収集を終え六月一日歸國

- ・小林敦子助手(東方部)は、文部省在外研究員として六月一八日伊丹發、スタンフォード大學、コロンビア大學、ハーバード大學、ロンドン大學、オックスフォード大學、ケンブリッジ大學に於いて、歐米に於ける中國研究文獻調査を行い一九九〇年三月三十一日歸國豫定
- ・柴山正進教授(東方部)は、六月二八日伊丹發、フランス、ギメ博物館に於いて開催の第一〇回南アジア考古學會に出席して七月八日歸國
- ・鈴木啓司助手(西洋部)は、七月一日成田發、フランス・ビジー、パリにおいて、フランス語

- ・フランス文化研修に出席し、パリ國立圖書館、パリ第七大學に於いて、フランス文學に關する研究調査を行い九月二〇日歸國
- ・岩熊幸男助手(西洋部)は、七月二三日成田發、サルティコフ・シチエドリン圖書館、パリ國立圖書館、レアル圖書館、バイエルン州立圖書館に於いて、中世論理學に關するラテン語所藏寫本閱覽を行って八月二八日歸國
- ・谷 泰教授(西洋部)は、文部省科學研究費補助金により、八月二〇日伊丹發インド・デリー市内、ファルガム周邊、ビカネール周邊でインド亞大陸における雜穀栽培とそれをめぐる農牧複合の研究を終え九月一九日歸國
- ・高田時雄助教授(東方部)は、九月二日伊丹發ヘルシンキ大學、ソ連東洋學研究所に於いて敦煌文書の調査、研究を行って九月二二日歸國
- ・狹間直樹教授(東方部)は、文部省在外研究員として九月一日成田發、パリ・國立科學研究センター、現代中國研究センター、ハーバード大學に於いて、歐米における中國近現代史の研

究の現状視察を終えて一〇月六日歸國

・田中雅一助教授(西洋部)は、文部省科學研究費補助金により、九月一五日伊丹發インド・デ

・リ、マドラスに於いてガングス河流域の複合文化形成動因の比較研究を終え十一月三日歸國

・田中 淡助教授(東方面部)は、九月二〇日伊丹發、臺北市に於いて第一回中國飲食文化學術研討會に出席、講演を行つて九月二六日歸國

・山室信一助教授(日本部)は、九月三〇日伊丹發、中國日本學研究センターに於いて、日本語教育、日本語教育に關する研究及び指導を行い、一九九〇年一月二九日歸國豫定

・阪上 孝教授(西洋部)は、十一月一日伊丹發、フランス國立文書館、國立圖書館、パリ市立文書院に於いて文化革命としてのフランス革命の研究を行つて一九九〇年四月二二日歸國豫定

・曾布川 寬助教授(東方面部)は、十一月一六日伊丹發、臺灣故宮博物院、中央研究院、臺灣大學に於いて中國美術の調査及び資料収集を行つて十一月二二日歸國

・外國人研究員(日本學客員部門)
Harold Boitno ハーバード大學教授

一八世紀日本における社會狀況の解明
受入教官 藤井助教授

期間 二月一日〜八月三〇日
James McMullen オックスフォード大學講師
前期江戸時代儒學の研究
受入教官 横山助教授

期間 九月二〇日〜一九九〇年三月二〇日
外國人研究員(比較社會客員部門)
孫昌武 南開大學教授

中國中世における宗教と文學の交渉について
の研究
受入教官 小南教授

期間 一月七日〜七月六日
Michael Witzel ハーバード大學教授
ヒンドゥーイズムの形成主體と傳播・ヴェー
ダ學派の傳承と地域分布
受入教官 井狩教授

期間 九月一日〜一九九〇年八月三十一日
本學招聘外國人學者受入れ要項により、本研究
所において共同研究に参加する外國人學者は次
のとおりである。
招聘外國人學者
Theodore Wm. de Bary コロンビア大學教授
新儒教の研究
受入教官 礪波教授

期間 三月二日〜七月二七日
曲翰章 中國社會科學院文獻情報中心副編審
日本および中國の漢字政策の研究
日本社會に於ける漢字使用狀況と情報處理の
調査
受入教官 高田助教授

期間 五月八日〜八月八日
官文娜 武漢市中南民族學院講師
日本近代文化史に關する研究
受入教官 飛鳥井教授

期間 一〇月一日〜一九九〇年九月三〇日
James L. McClain ブラウン大學助教授
近世前期都市行政と庶民生活についての研究
受入教官 横山助教授

期間 十一月一日〜一九九〇年七月一日
外國人共同研究者

Gerard Fussman ユーリッシュ・ド・フランス
教授
北西インドにおける佛教彫刻および碑銘の研
究
受入教官 桑山教授

期間 四月三日〜五月二日
Aurora Testa イタリア東アジア研究所研究
員
唐代の鏡の考古學的研究
受入教官 桑山教授

期間 七月二三日〜一〇月二二日
本學研修員規程により、本研究所において、研
修する外國人研修員とその題目は次のとおりで
ある。
Mesnil Evelynne パリ第七大學院生
五代四川佛教と道敍繪畫
指導教官 荒井教授

期間 四月一日〜一九九〇年三月三十一日
吳琦來 北京外國語學院日本學研究センター學
生
古代日本人の宗教思想の一側面 ―「竹取物
語」に見える神仙信仰をめぐって―
指導教官 麥谷助教授

期間 三月一日〜八月一四日
Eric Laurent パリ第七大學院生
日本における民族動物學

指導教官 谷 教授

期間 一〇月一日～一九九〇年三月三十一日

Richard Piorunski フランス國立東洋言語文

明研究所博士課程

現代の日本社會と社會變化、社會變化の過程

とその要因

指導教官 谷 教授

期間 一〇月一日～一九九〇年三月三十一日

賀躍夫 中山大學博士研究生

清末民初中國的社會思潮變遷與日本

指導教官 狹間教授

期間 一〇月一日～一九九〇年一〇月一日

日

Julia A. Nakano ハワイ大學大學院生

近代日本茶道の歴史——古田織部と大名茶及

びお伽衆についての研究——

指導教官 飛鳥井教授

期間 十一月一日～一九九〇年九月一日

出版物

紀要

東方學報 第六一冊(紀要第一〇八冊)

一九八九年三月三十一日刊

人文學報 第六四冊(紀要第一〇九冊)

人文學報 第六五冊(紀要第一一〇冊)

一九八九年三月三十一日刊

研究報告その他

明末清初期の研究 岩見 宏・谷口規矩雄編

一九八九年三月三十一日刊

國家—理念と制度—

一九八九年三月三十一日刊

中村賢二郎編

中國古代科學史論

一九八九年三月三十一日刊

所報「人文」第三五號

一九八九年三月三十一日刊

山田 慶兒編